

2019年度 日本臨床ゲシュタルト療法学会 第10回記念大会

「ゲシュタルティストが語るとき」



《日時・場所・参加費》

日時：2019年12月8日（日）10：00～18：00（受付9：30～）

場所：関西大学千里山キャンパス第3学舎1号館A201教室

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35（阪急電鉄「関大前」北口から徒歩約5分）

参加費：学会員5,000円、非会員7,000円、大学院生・学部生3,000円

*臨床心理士の継続研修ポイントを申請予定です

*学会入会には審査があるため、学会員での参加希望者は早めの入会申込をお願いします。

《プログラム（予定）》

9：30～10：00 受付

10：00～10：05 開会の挨拶 開催校代表 細越 寛樹（関西大学）

10：05～11：30 基調講演「私はいかにしてゲシュタルティストになったか」

司会者：阿津川 令子（関西大学）

演者：倉戸 ヨシヤ（大阪市立大学名誉教授）

11：30～12：45 昼休憩

12：45～13：30 口頭発表1「気づきを促す3つの質問を活かした実験の実践報告」

発表者：中西美和（大阪女学院大学）

13：40～14：25 口頭発表2「素敵な吃音の世界のご紹介ーゲシュタルトの皆様方へー」

発表者：佐藤隆治（全国言友会連絡協議会）

14：40～16：10 フォーラム「私はいかにして心理臨床家になったか」

司会者：（調整中）

話題提供者：宮井 研治（京都橘大学）

金子周平（九州大学）

倉戸 由紀子（追手門学院大学名誉教授）

16：25～17：35 学会全体の体験のシェア

司会者：中西 龍一（京都橘大学）

原谷 直樹（大阪府障がい者自立相談支援センター）

17：40～18：00 総会 事務局長 中西 龍一（京都橘大学）

《お申し込み方法》

①2019年12月1日（日）までに、「申込書」を学会事務局までメールにてお送り下さい。

記入した申込書をメールに添付していただくか、申込書の内容を直接メール本文にご記載下さい。メールが使用できない場合のみ、郵送にてお送り下さい。

②「申込書」の確認後、学会事務局から受付確認のメールをお送りします。

③上記でお申し込み手続きは完了です。参加費は当日に会場でお支払い下さい。

学会事務局 〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

（兼問い合わせ先） 京都橘大学 健康科学部 心理学科 中西龍一研究室気付

日本臨床ゲシュタルト療法学会事務局

E-mail：clinical_gestalt@outlook.jp

学会 HP：http://www.clinicalgestalt.gr.jp

<基調講演>

ゲシュタルティストが語るとき

倉戸ヨシヤ(大阪市立大学名誉教授)

心理臨床家には、人の一生における喜びや悲しみ、どのようなときにへこみ、どのようなときに和らげられたり、癒されるのか、人間理解(人格論)の省察を持っていることが、望ましい。加えて、心理臨床は座学ではなく実学なので人間理解の省察について専門的かつ実践的な教育・訓練を受けることが必須である。とくに心理療法家になるためには自らが心理療法を受けた経験があり、自ら和らげられたり、癒された経験のあることがクライアントに寄り添える、あるいは気持ちを和らげたり、癒したりすることへの手がかり(武器)になる。

ところで演者はどのようにして人間理解の省察を持ち、専門的な教育・訓練を受け、どのようなケースにあたり、実践をしてきたか、ゲシュタルティストとして語ってみたい。そのとき何が起るのか、興味津々である。

<口頭発表1>

気づきを促す3つの質問を活かしたエクスペリメントの実践報告

中西 美和(大阪女学院大学)

ゲシュタルト療法の創始者であるパールズ(Perls, 1973)は、自己の気づきが広がることで、外界に対して適応できる範囲や操作できる範囲が広がり、より大きな自由をもって行動の選択ができるようになること、さらに、瞬間、瞬間にその場に自分を位置づけることも可能となり、自分と自分が置かれている場へのコンタクトも良くなると指摘している。このような自己への気づきを促すために、パールズは3つの質問を提唱している。3つの質問とは、「あなたは、今、何をしているのですか」、「あなたは、今、何を感じていますか」、「あなたは、今、何をしたいのですか」である。

演者は、「自己の発見」という学内合宿プログラムの中で、集団描画法(中西, 2015)を採り入れたエクスペリメントを実施し、上述の3つの質問を用いて、参加者の気づきを促進する介入を試みた。その結果、これらの質問は、自己の在り方への気づきを促す一助となり得ることが示唆された。しかしながら、本エクスペリメントを実施する上での課題もある。本発表では、このエクスペリメントの実践報告を行うことで、エクスペリメントの実施上の課題を問い、3つの質問の理解を深める機会としたい。

引用文献

Perls, F. (1973). *The Gestalt Approach & Eye Witness to Therapy*, Science and Behavior Books, Inc.

(F・S・パールズ(倉戸ヨシヤ監訳)(1990). *ゲシュタルト療法—その理論と実際* ナカニシヤ出版)

中西龍一(2015). *ゲシュタルトアプローチ導入のための集団描画法* 京都橘大学心理臨床センター心理相談研究 1, 29-34

<口頭発表2>

「素敵な吃音の世界のご紹介—ゲシュタルトの皆様方へ—」

佐藤 隆治(全国言友会連絡協議会)

吃音(話す言葉がどもること)を持つ子供達は治したいと考える。母親は治らないのは努力不足と責める。スピーチセラピスト(STと略)もおおよそ同様。行きつくところは、母親(STも)の前において、どもることさえできなくなることである。治らないものどうまく付き合い生きる学びに向け、小中高校生男女が自身の吃音を外在化し、対話を始める。Gestalt 序章に踏み込んでおり、力強くサポートする力を身に着けたい。

<フォーラム>

「私はいかにして心理臨床家になったか？」

“私はどうしたら心理臨床家になれるのか? ”、心理臨床に携わる者にとっては、全ての世代を通して、自問自答し続けていかなければならない問いかけではなかろうか? 社会的法的な枠組みとしての資格制度は、有名無実ではないものの、それが必要十分条件などと言いきれる心理臨床家はいないであろう。また、声高に何の躊躇いもなく、「私は有能な心理士です」などと主張する臨床家のもとには、クライアントはそう集まらないものであろう(昨今はそうでもないのかもしれない)。

「何が成長を促すのか?」「必要なものは何なのか?」「自分はいまどの辺りにいるのか?」この古くて新しい問いかけについて、日々ゲシュタルトセラピストとして研鑽を積んできた先生や、セラピストとしての成長過程においてゲシュタルト療法の強い洗礼を受けた先生を話題提供者としてお迎えして、フォーラムを開催したい。また、フロアーからも活発なご意見をいただきたい。

話題提供 : 倉戸由紀子(追手門大学名誉教)

: 宮井研治(京都橘大学)

: 金子周平(九州大学)